関連事業

「アーティスト・トーク」
9月7日［日］13:30～14:30（約60分）
レクチャールーム2展示室、定員30名
11月8日［土］15:00～16:00（約60分）
聞き手：林洋子（当館館長）
レクチャールーム、定員80名

「こどものイベント」
11月8日［土］10:15～12:30
講師：中谷ミチコ
アトリエ2と展示室、定員15名

展覧会情報

2025コレクション展Ⅰ小企画
美術の中のかたち―手で見る造形
中谷ミチコ「影、魚をねかしつける」

会期：2025年9月5日［金］～12月14日［日］
会場：兵庫県立美術館 常設展示室5（東側）
主催：兵庫県立美術館、『瀬戸内美術館連携』プロジェクト実行委員会（事務局：公益財団法人 福武財団、独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁）
協賛：公益財団法人伊藤文化財団、サンシティタワー神戸1（株式会社ハーフ・センチュリーモア）、株式会社アリエズ/藤忠商事
協力：認定NPO法人 神戸アイライト協会、点訳ボランティアグループ連絡会、株式会社アートフロントギャラリー

Supported by Mitsubishi Corp.
『瀬戸内美術館連携』
JAPAN CULTURAL CONSULAR
文化庁海外日本人会館と連携・連携型

［コレクション展無料の日］
○毎月第2日曜日（自治会に話せる展覧日）は
公益財団法人伊藤文化財団の協賛により無料
○敬老の日は、居内居住者70歳以上の入無料
○文化の日、国際文化の日、国際障害者デー は無料

写真撮影：若林亮人
デザイン：北風総貴（ヤング荘）
印刷：有限会社リーストワーク

編集・発行：兵庫県立美術館
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1
TEL:078-262-1011（代表）

ごあいさつ

兵庫県立美術館では、前身の兵庫県立近代美術館の時代から、「美術の中のかたち―手で見る造形」と題した展覧会を継続的に開催してきました。作品に触れて鑑賞する本シリーズは、視覚に障害のある方にも作品を楽しんでいただくことと、視覚に依るだけにとどまらない美術鑑賞のあり方を探ることを目的にしています。35回目となる今回は、彫刻家・中谷ミチコ(1981-) の作品を紹介します。中谷は、四色が反転したレリーフ状の作品で知られています。粘土を盛り上げて作った人のかたちを石膏で型取ると、人のかたちがあるはずの部分が凹みます。そこに人のかたちは存在しないのですが、確かに人の姿が在ります。鑑賞者は視覚と実体のズレに一瞬混乱し、その不思議さに引き込まれます。そして視覚ではとらえきれないものがあるということを知るのです。

今回展示される新作は、これまでの中谷の作品とは異なり彩色が施されていません。白いままの石膏の中に存在するかたちは、陰影によってのみ見出すことができます。存在の確かさと共にある不確かさに直に触れ、美術作品の鑑賞のあり方について思いを巡らせてみてください。

影、魚をねかしつける。| *Shadow, Lulling the Fish to Sleep*　中谷ミチコ

「粘土」
粘土を手で練っていると、私の内部に矛盾が無くなる。
身体と心が一つになって、まるで海で泳いでいるみたいだ。
まだ形の無い、粘土のケケラに水を含ませ、泥から形を作る。
泥で形を作っていると、ある時、存在の気配が現れる。
その気配を、信じて探す。
私が諦めたら彼らの存在は不完全なまま、本当のことにならない。
だから探し続ける。

「物語」
沢山の人が何かをしている。その仕草が他者に影響したり、しなかったり、
繋がったり、繋がらなかったり。物語は始まりそうで始まらない。
沢山の主役の沢山の物語の中で立ち止まってどこから始めようか、迷っている。

「石膏取り」
型取りが終わると、真っ先にその内部に手を差し入れて、
湿れた石膏の温度を感じながら崩壊した人たちを確かめる。
人たちの形は再び泥になる。
表裏は入れ替わり、向こう側の景色は埋まる。粘土の側に入る。
石膏の内側に影が張り付き、新しい気配を生み出す。影に触る。

「触る」
大きな流れを読むことと反対に、ひとまず手の届く場所を確かめることは、きっと何かを始めるきっかけになる。
触って、そこにぽっかりと空いた空洞を確かめる。
気配の形は、物語の断片は、
ほっぺたの柔らかさに触れる瞬間から始められる。
不確かさを確かめる。
指先で、手のひらで、両方の手で、抱きしめるみたいに。

「ねかしつける手」
ねかしつける手つきは、
ここに居ないよにな弱の、ここに居るよの優しいサインだ。

ミュージアムは全ての人に開かれた場所です。誰もが楽しめる博物館を指す「ユニバーサル・ミュージアム」という言葉も聞こえて久しい現在ですが、美術館は相変わらず視覚優位の場所と言えます。しかし、視覚は極めて頼りないものでもあります。では作品をどのように鑑賞するのか。本展はこれまで「触る」ということを通して、美術作品の鑑賞のあり方を問いかけてきました。
今回の中谷ミチコの作品は、主に視覚で美術作品を鑑賞していた人にも、主に手で触って鑑賞していた人にも、初めての体験となるでしょう。何故なら、私達は、そこに無いものを触るということをしたことがないからです。視覚で見ていた人は、そこにあるように見える人体が実際には無いということを知り混乱するでしょう。触ってきた人は、人の体を内側から触る体験に戸惑われるかもしれません。いずれにせよ、この体験が、みなさんそれぞれの鑑賞を深める機会となれば嬉しいです。

遊免寛子(当館学芸員)

出品作品 作品名、制作年、素材、寸法:h×w×d

1《試作》2024年
モルタル、透明樹脂、アクリル着彩　42.8×31×7cm
2《影、魚をねかしつける》2025年
石膏、麻、木、ステンレス　210×1,081×287.5cm
展示設計:大宝佑介
3《影、魚をねかしつける 1/10マケット》2025年
水性樹脂、グラスファイバー　20.3×112×34.5cm
※すべて作家蔵

中谷ミチコ | NAKATANI Michiko

1981年　東京都生まれ
2005年　多摩美術大学美術学部彫刻学科卒業
2010年　VOCA2010奨励賞
　　ドレスデン造形芸術大学卒業
2012年　文化庁派遣芸術家海外研修(ドイツ)※2014年まで
2014年　ドレスデン造形芸術大学　マイスターシューラーストゥディウム修了
2023年　第43回 中原悌二郎賞 受賞
　　現在、多摩美術大学美術学部彫刻学科 准教授
　　三重県にアトリエを構え活動中

[主な個展]
2009年　「Beautiful Fish」BunkART Mini(神奈川)
2011年　「境界線のありか」横浜美術館アートギャラリー1(神奈川)
2019年　「そのかさな宇宙に立つ人」三重県立美術館(三重)
2022年　「テコボコの身/すくう、すくう、すくう」
　　アートフロントギャラリー(東京)

[主なグループ展]
2010年　「VOCA展2010　現代美術の展望―新しい平面の作家たち」
　　上野の森美術館(東京)
2016年　「生きとし生けるもの」ヴァンジ彫刻庭園美術館(静岡)
2018年　「越後妻有アートトリエンナーレ 大地の芸術祭」(新潟)
　　「20th DOMANI・明日展」国立新美術館(東京)
2021年　「奥能登美術祭2020+」(石川)
　　「空間の中のフォルム」神奈川近代美術館 葉山(神奈川)
2022年　「丸の内ストリートギャラリー」丸の内ストリートギャラリー(東京)
　　「春を待ちわびて」三重県立美術館(三重)
2023年　「まなざしのゆくえ」中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館ステーションギャラリー(北海道)
2025年　「瀬戸内国際芸術祭2025」秋会期(香川)

1《試作》

2《影、魚をねかしつける》

3《影、魚をねかしつける 1/10マケット》